

基肄城築造1350年

基肄城を知る⑥

大宰府の防衛線

昨年は水城が、今年は基肄城・大野城が築造から1350年の節目の年を迎えます。

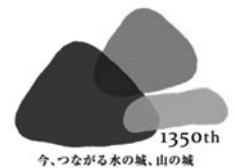
これらは、663年の白村江の敗戦を大きな契機として、我が国防衛のために造られたものとして知られていますが、1350年前という大昔に、当時の日本は、国家の危機を克服するためにどのような国防策をとったのでしょうか。

まずは、朝鮮半島に最も近い九州北部の防備を固めることから始めています。つまり、この一帯に防人と烽火を配置し、博多湾沿岸にあつたと推定される軍事と九州を統括する大宰府を内陸部に移すとともに、この防衛施設を整備しました。これらは、百済の亡命官人の指導のもと、百済最後の都である扶余をモデルとしたと言われており、山や河川など、自然地形を最大限に利用したものでした。

博多湾に面する福岡平野から南方向へ行く和二日市地峡帯と

いう、東西の丘陵に挟まれた最も平野部の狭いところがあります。ここは、現在もJR鹿児島線や国道3号線、さらに高速道路などの主要路線が集中しており、博多湾から南下して九州内陸部をつなぐ交通の要衝地です。ここを遮断するように、水を貯えて敵の正面にあたる北側に、幅60mもの濠を備えた高さ10mにも及ぶ水城を造り、さらに西側の谷間を小水城で塞いでいます。これらを防衛線としてこの南東部に大宰府を置き、国防のための拠点としたのです。そして、北側に隣接して大野城を造り、北（博多湾側）の守りとしています。さらに、ここから南へ約10kmの地点には、基肄城を造り、しかも基肄城の南東麓の古代官道が走っていたと推定されるルート沿いで、現在国道3号線が通るJR基山駅の北側では、水城と同じ目的で南側から

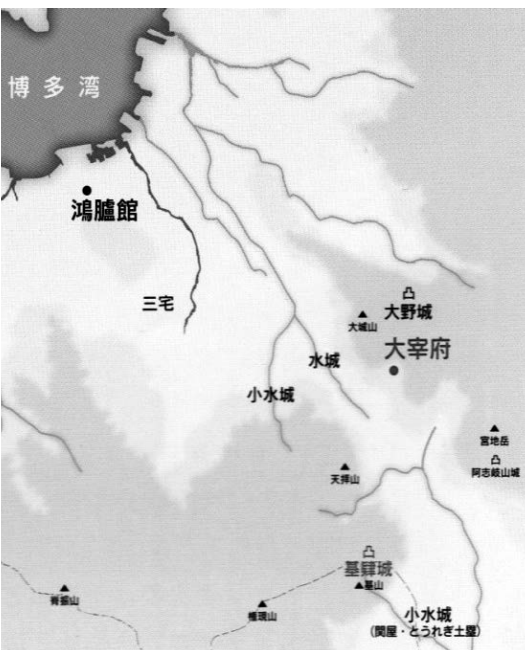
の敵の侵攻に備えるために、関屋土塁・とうれぎ土塁を造るこ



とで、南（有明海側）の守りとしたのです。

このように、大宰府の南北にある軍事・交通等の重要な所には、それぞれ水城あるいは小水城・大野城・基肄城という守りの拠点を配置し、それぞれから延びる天然の険しい丘陵は自然の城壁としてこれらをつなぐように廻り、大宰府を囲んでいきます。このような状況は、地図や航空写真からも容易に読み取る

ことができます。左図参照）



大宰府を囲む主要史跡位置図

※問合せ先 教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92-2200



基肄城航空写真（背後に大野城跡・水城跡）